

# **垂水南遺跡発掘調査報告書Ⅱ**

## **—垂水南遺跡第57次発掘調査—**

平成27(2015)年3月

吹田市教育委員会

# 序

吹田市では、これまでに文化財保護事業として埋蔵文化財の発掘調査を数多く実施してきました。中でも垂水南遺跡では59次にわたる発掘調査を行い、吹田市内の遺跡でもっと多くの調査を実施してきた遺跡です。これは、垂水南遺跡が大阪市営地下鉄御堂筋線江坂駅の東側に広がり、事務所ビルや共同住宅などの建設が盛んに行われたため、開発工事とともに発掘調査の機会が多くあったことによります。

本書で報告する第57次調査についても、共同住宅の建設にともない実施したものです。発掘調査では、古墳時代を中心とする遺物とともに流路や護岸の痕跡などが見つかりました。これまでの垂水南遺跡の発掘調査においても古墳時代の川跡が確認されている地点が多くあり、また、住居跡とみられる建物の痕跡も見つかっているところもあります。今後、発掘調査の成果がさらに増え、それらをつなぎ合わせていくと、古墳時代の垂水南遺跡の全体像が見えてくるものと思われます。そして、今回の調査成果についても、蓄積された資料をつなぎ合わせていく上で不可欠なデータとなるでしょう。今後、本書でまとめた資料が、垂水南遺跡を解明する一助となれば幸いです。

平成27（2015）年3月

吹田市教育委員会

教育長 梶 谷 尚 義

## 例　言

1. 本書は、平成9（1997）年度に吹田市垂水町3丁目19-5において共同住宅建築に伴う事前調査として実施した、垂水南遺跡第57次調査の成果をまとめたものである。
2. 現地における発掘調査は、吹田市立博物館文化財保護係（現・文化財保護課）田中充徳・堀口健二が担当した。整理作業については、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施し、資料の保管も同所において行っている。
3. 本報告書の執筆・編集作業は、田中と見解を取りまとめながら、堀口が行った。
4. 本文中の遺物番号は、挿図・写真図版とも統一した。遺物の縮尺は、土器実測図は1/4、木製品は1/3を基本とした。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。
6. 発掘調査および報告書作製にあたっては、次の各位よりご協力、ご教示を頂いた。記して感謝いたします。

小西寛氏、（公財）元興寺文化財研究所
7. 発掘調査および資料の整理には、以下の諸氏の参加を得た。

〔発掘調査〕  
佐藤健太郎・高橋洋・森大樹  
〔整理作業〕  
花崎晶子・小川里美・木船安紀子・小久保瞳・高井明美・林裕子

# 目 次

|                      |    |
|----------------------|----|
| 第1章 位置と環境.....       | 1  |
| (1) 地理的環境.....       | 1  |
| (2) 歴史的環境.....       | 1  |
| (3) 垂水南遺跡の既往調査 ..... | 3  |
| 第2章 調査の経過と方法.....    | 5  |
| 第3章 調査成果.....        | 7  |
| (1) 基本層序.....        | 7  |
| (2) 検出遺構.....        | 9  |
| (3) 出土遺物.....        | 11 |
| 第4章 総括.....          | 23 |
| (1) 遺構の変遷.....       | 23 |
| (2) 出土遺物.....        | 24 |

# 挿図目次

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 第1図 吹田市周辺の地形.....     | 1  |
| 第2図 周辺の遺跡分布図.....     | 2  |
| 第3図 垂水南遺跡調査地周辺図.....  | 4  |
| 第4図 調査区配置図.....       | 5  |
| 第5図 上層柱状図.....        | 5  |
| 第6図 土層断面図.....        | 6  |
| 第7図 第1面遺構図.....       | 8  |
| 第8図 第2面遺構図.....       | 8  |
| 第9図 第3面遺構図.....       | 10 |
| 第10図 護岸S X 4 遺構図..... | 11 |
| 第11図 護岸S X 4 拡大図..... | 12 |
| 第12図 遺物出土状況図.....     | 12 |
| 第13図 包含層出土遺物（1）.....  | 14 |
| 第14図 包含層出土遺物（2）.....  | 16 |
| 第15図 包含層出土遺物（3）.....  | 18 |

|      |            |    |
|------|------------|----|
| 第16図 | 包含層出土遺物（4） | 20 |
| 第17図 | 出土層位不明遺物   | 21 |
| 第18図 | 木製品実測図     | 22 |
| 第19図 | 第8次・57次遺構図 | 23 |

## 写真図版目次

- 図版1 第1面遺構・遺物出土状況
- 図版2 第2面遺構・遺物出土状況
- 図版3 第3面遺構
- 図版4 第3面遺物出土状況
- 図版5 土層断面
- 図版6 発掘調査の経過
- 図版7 上師器（1）
- 図版8 上師器（2）・須恵器（1）
- 図版9 須恵器（2）
- 図版10 瓶形土製品・木製品

# 第1章 位置と環境

## (1) 地理的環境（第1図）

吹田市は大阪府北部に位置している。南は大阪市と境界を接し、その市境にはほぼ沿うような形で安威川・神崎川が北東から東南に向けて流れている。

吹田市域の南側には、主に神崎川や淀川などの氾濫によって形成された沖積平野が広がり、一方の市域北部は千里丘陵が占めており、市域の北部と南部とでは対照的な地形を形成している。

吹田市内において千里丘陵は標高80m以下の丘陵地帯となる。平野部については千里丘陵南端部付近を境として、東側を安威川低地、西側を神崎川低地として区分される。またJR吹田駅付近より南側には、繩文海進時に形成されたとされる吹田砂堆が広がり、平野部において微高地を形成している。

## (2) 歴史的環境～吹田の古墳時代～（第2図）

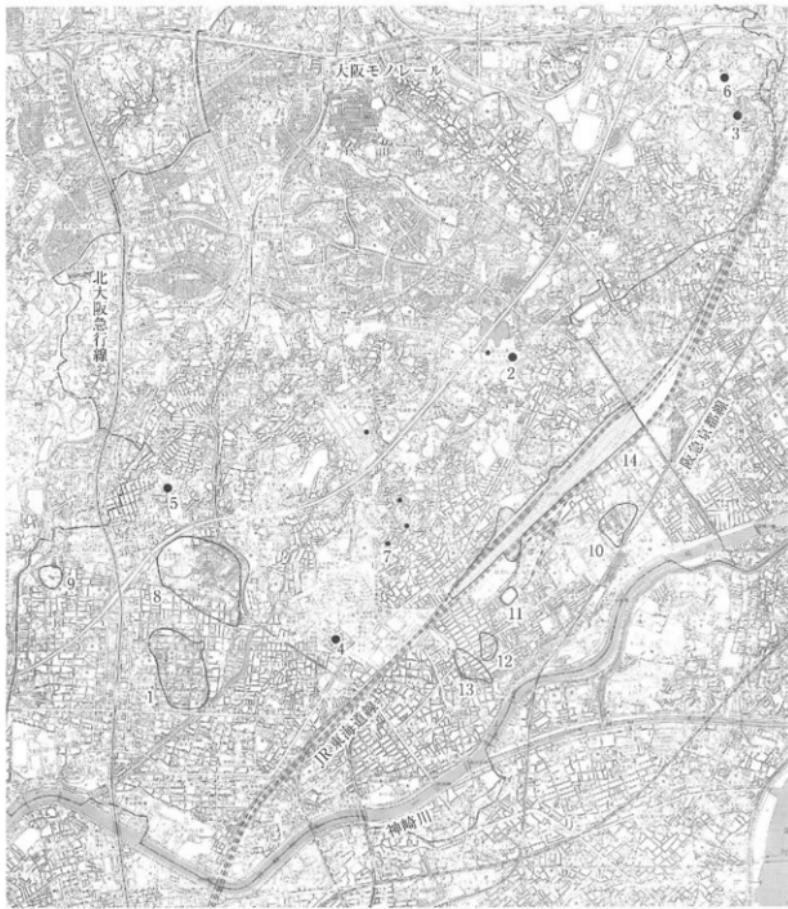
今回の発掘調査では古墳時代を中心とした資料が得られたことから、ここでは吹田市内の代表的な古墳時代の遺跡について概観しておく。

まず、古墳であるが、吹田市域で確認されている古墳はそれほど多くない。これまで発掘調査された古墳は、吉志部古墳と新芦屋古墳の2基のみであり、ともに終末期古墳である。吉志部古墳については無袖式横穴式石室を有する円墳であることが確認されているが〔関西大学1973〕、新芦屋古墳については工事中の発見ということで墳形は不明である。しかし、その主体部である墓室は木材で構築された木室墓であり、組み合わせ式の家形石棺を持つ全国的にも検出例の少ない古墳である。

また早くに墳丘が失われて詳細は不明であるが、遺物を残すものとして、前期古墳の可能性がある垂水西原古墳、後期の出口古墳や松下電気保険センター古墳などがあるほか〔網干1981〕、陶棺片の出土から古墳の存在が確認されている地



第1図 吹田市周辺の地形  
(前田1990文献を基に作図)



- |          |                  |           |             |
|----------|------------------|-----------|-------------|
| 1. 垂水南遺跡 | 5. 垂水西原古墳        | 9. 櫻坂遺跡   | 13. 高城B遺跡   |
| 2. 青志部古墳 | 6. 松下電器保健センター古墳  | 10. 中ノ坪遺跡 | 14. 吹田操車場遺跡 |
| 3. 新芦屋古墳 | 7. 吹田須恵器窯跡 No.32 | 11. 目佐遺跡  |             |
| 4. 出口古墳  | 8. 垂水遺跡          | 12. 高城遺跡  |             |

第2図 周辺の遺跡分布図 (S=1/40,000 上方が北)

点がこれまでに10箇所ある。そして、古墳を含めて陶棺片出土地のほとんどは千里丘陵上で認められている。

次に、吹田市域の古墳時代の特徴として挙げられるものが、須恵器の生産である。隣接する

豊中市域を含め、千里丘陵の粘土・燃料・斜面地を利用して数多くの須恵器窯が構築され、吹田市ではこれまでに56箇所の須恵器窯が確認されている。なかでも5世紀初頭に構築された吹田32号窯跡は初期須恵器窯として知られているが、吹田市域での須恵器生産は6世紀前半から7世紀前半の間に窯業の盛期をもち、7世紀末に終焉を迎えると考えられている〔中村・藤原1996〕。また、須恵器窯には陶棺片が出土するものもあり、須恵器生産と古墳の展開との関連性も想定されている。

さて、丘陵部では古墳と須恵器窯の展開が見られるが、集落遺跡について見ると、丘陵南側に広がる平野部で良好な資料を伴う遺跡が多い。垂水南遺跡の北側に位置する垂水遺跡は、丘陵部から平野部に広がり、弥生時代の高地性集落として知られる遺跡であるが、丘陵下の平野部で実施した第24次調査では、水銀朱が付着し加熱痕のある土器片や、破碎され溶解の途中で破棄されたと考えられる銅鏡片など、古墳時代前期の良好な資料が得られている〔吹田市2005〕。

この他に、垂水南遺跡の周辺平野部（神崎川低地）に展開する遺跡では、藏人遺跡・桜坂遺跡・五反島遺跡などが代表的なものとして挙げられ、河道跡や溝跡などから良好な資料が得られているが、桜坂遺跡では古墳時代前期の堅穴式住居2棟が検出されている。

また、市域東側の平野部（安威川低地）における代表的な遺跡には、目俤遺跡・中ノ坪遺跡・高城遺跡・高城B遺跡・吹田操車場遺跡などがある。目俤遺跡では、低湿地に臨む微高地上に古墳時代前期のものと考えられる掘立柱建物跡が7棟確認され、中ノ坪遺跡においても古墳時代前期の6棟の掘立柱建物跡が微高地上に認められている〔吹田市1999〕。中ノ坪遺跡における建物跡は、庇を持つ平地式建物や高床式の総柱建物が軸線を揃えて直列するように並び、祭祀あるいは政治空間の利用を示唆させる〔吹田市2012〕。

古墳時代後期の資料としては、高城遺跡において空間を区画するとみられる溝やピット〔吹田市2001a〕、高城B遺跡では建築部材を井戸枠に転用した井戸が出土している〔吹田市2001b〕。また吹田操車場遺跡では、JR岸辺駅付近で古墳時代の群集土坑が数多く検出されており、須恵器生産との関連も想定されているが、群集土坑は検出面で標高7～8mであり、吹田操車場遺跡自体は平野部の中において河川起源の沖積低地からはやや高位な位置に展開している〔大阪府2008〕。

### （3）垂水南遺跡の既往調査～古墳時代の成果を中心に～（第3図）

垂水南遺跡は、弥生時代から中世にわたる複合遺跡である。同遺跡は、昭和41（1966）年に土地区画整備事業に伴う下水管埋設工事で、土器や木製品が多量に出土したことにより周知されることになった。

昭和51（1976）年に行われた第1次調査では、周溝を持つ方形堅穴住居や、建替えの痕跡を

持つ梁間2間×桁行3間以上の高床式建物が確認された〔網干1981〕。

第3次・40次調査では、河道の堤防と見られる木組造構が出土した。木組造構は、盛土に杭を打ち自然木や建築部材の転用材を横木に置いて、その間に小枝を敷き詰めており、護岸工法の一端が明らかになった〔吹田市1977〕。

第4次・51次調査では、竪穴式住居4棟と高床式建物2棟以上の柱穴が出土したほか〔吹田市1978〕、楯と思われる物を描いた絵画土器布留式甕が出土した〔吹田市1996〕。

第8次調査では、矢板が打ち込まれた通路を兼ねた幅2~3mの大畦畔が出土した。また畦畔周囲の土壤分析の結果、高濃度のイネ科花粉が検出されている。〔網干1981〕。

第31次調査では、石製の勾玉・白玉・有孔円盤などの未成品が数多く出土し、製作工房の存在が想定されている。

第48次調査では、周縁に熱を受けた焼土坑の他、砥石、フイゴ羽口、鉱滓などの遺物が出土し、金属器生産との関連を示唆させる。



第3図 垂水南遺跡調査地周辺図  
数字は調査次数（上方が北 S=1/5,000）

第58次調査では、東西方向に流れる河道内より、弥生時代中期から古墳時代中期にわたる弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器などが良好な状態で多量に出土した。

その他、第6次・15次・59次調査では、古墳時代前期を中心とする土器の集積が確認されている。

このように、これまでの垂水南遺跡における調査では、建物跡などの居住域に水田跡などの生産域、河川などの周辺環境に関連する遺構が確認されている。

#### 【参考文献】

網干善教（編） 1981「考古編」『吹田市史』第8巻  
吹田市史編さん委員会・吹田市役所

（財）大阪府文化財センター 2008『吹田操車場遺跡』Ⅲ

関西大学考古学研究室ほか 1973「吉志部古墳発掘調査報告」

吹田市教育委員会 2001a「高城遺跡」『平成12年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』



第4図 調査区配置図

吹田市教育委員会 2001b『高城B2遺跡  
第2次発掘調査報告書』

吹田市教育委員会 2005『垂水遺跡発掘  
調査報告書』I

吹田市教育委員会 2012『中ノ坪遺跡発  
掘調査報告書』I

吹田市教育委員会 1977『垂水南遺跡発  
掘調査概報』

吹田市教育委員会 1978『垂水南遺跡発  
掘調査概報』II

吹田市教育委員会 1984『昭和58年度 埋  
蔵文化財緊急発掘調査概報』

吹田市教育委員会 1996『平成7年度 埋  
蔵文化財緊急発掘調査概報』

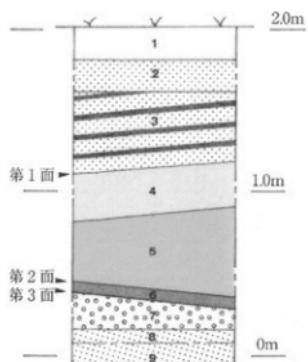
吹田市教育委員会 1999『日伏遺跡』

中村浩・藤原学 1996『須恵器集成図録』第2巻(近畿編II) 雄山閣出版

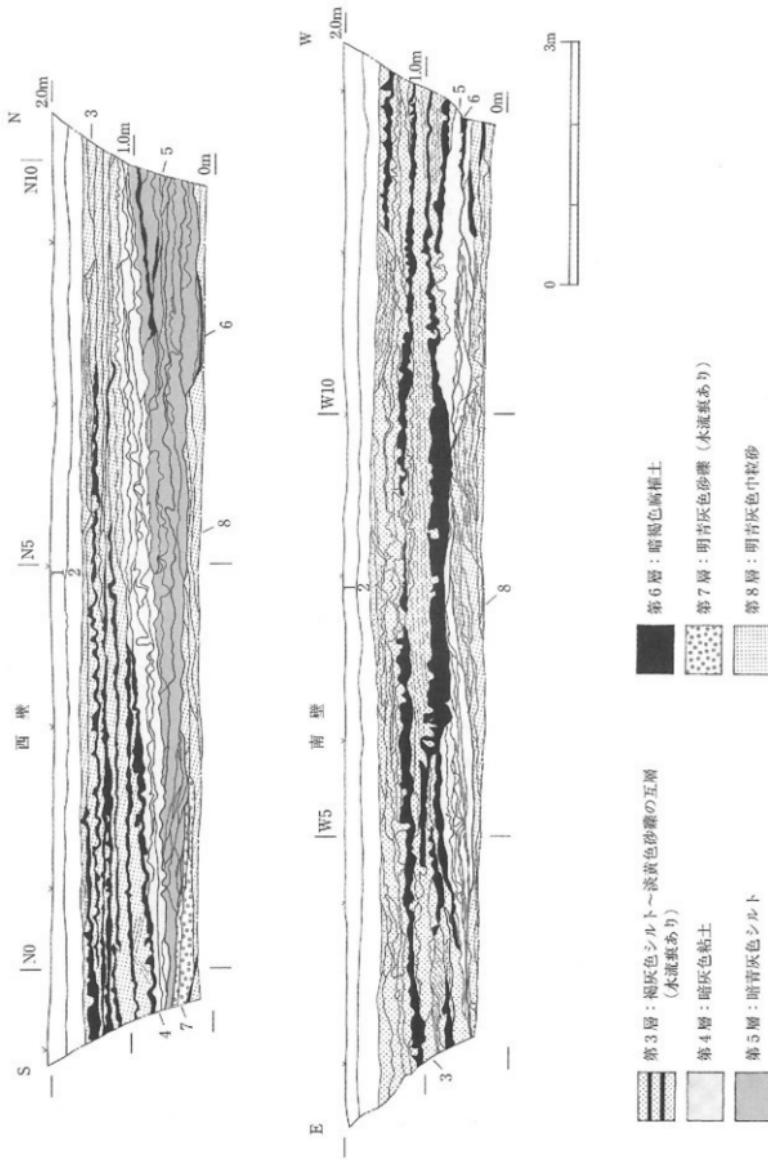
前田昇 1990『地質と地形』『吹田市史』第1巻 吹田市史編さん委員会・吹田市役所

## 第2章 調査の経過と方法(第4図、図版6)

今回の発掘調査は、共同住宅の建設工事に伴い実施したものである。当該工事予定地は垂水南遺跡の包蔵地内に位置していたことから、まず平成13(2001)年2月19日に確認調査を行った。その結果5か所(23m<sup>2</sup>)の調査区のうち2か所から、落ち込み状遺構や弥生土器・土師器などの遺物の出土を確認した。これにより予定される建築工事が着工された場合、遺構・遺物が破壊されると判断されたため、事業者と協議を行い、予定の建築物で遺構・遺物の破壊が考えられる部分について、記録保存のための拡大調査を実施したものである。拡大調査は工事予定地内の範囲のうち遺構・遺物の包蔵が考えられる部分について、東西11m×南北10m、面積106m<sup>2</sup>の調査



第5図 土層柱状図 (S=1/30)



第6図 土層断面図

区1か所を設定し、平成13年3月5日より重機および人力によって地表面から掘削を進めた。

調査区の設定後、現代盛土層・攪乱層については重機を使用して掘削を行い、それより下層は人力により注意深く掘削した。そして各遺物包含層を掘削する毎に、各層上において遺構の検出作業を行い、検出遺構および遺物の出土状況については、写真撮影および遺構平面図・土層断面図作成などの記録作業を行い、3月23日に終了した。

### 第3章 調査成果

#### (1) 基本層序(第4図、図版5)

当調査地は神崎川低地に立地して、北東が高く南西に緩く傾斜して低くなる。調査地周辺の地表面は標高約2.6mであるが、当地は田畠として利用されていたため、周囲のかさ上げから取り残される状態となり、50~60cmほど低くなっていた。

調査区内の土層堆積状況を巨視的に見ると、大きく三つの不整合面が認められた。第1・2層は水平堆積で、第3・4層は南へ傾斜し、第5・6層は逆に北へ傾斜して、第7層以下は再び水平堆積である。土質は一部にシルト(泥土)や粘土が堆積するが、第3層より下層は水流痕が随所に観察できた。これは洪水砂層や河川堆積物に起因する水成堆積層であり、現在でも豊富な湧水が見られた。

調査区内では大きく9層の層序区分が可能であり、以下に土質の概要を記す。

第1層：暗灰色土。層厚約20cmを測る。現代の耕土である。

第2層：灰白色砂質シルト。層厚約20cmを測る。ほぼ水平堆積で、遺物をほとんど含まない。

第3層：淡黄色細粒砂～褐灰色シルトの互層。層厚約45~90cmを測る。西壁断面に斜交葉理、南壁断面に平行葉理が見られ、北西から東南に対して緩やかに傾斜している。砂とシルトの互層からなる水成層で、流速の早い時期と緩やかな時期とを交互に繰り返しながら堆積していったことを物語る。古墳時代の須恵器をやや多く包含する。

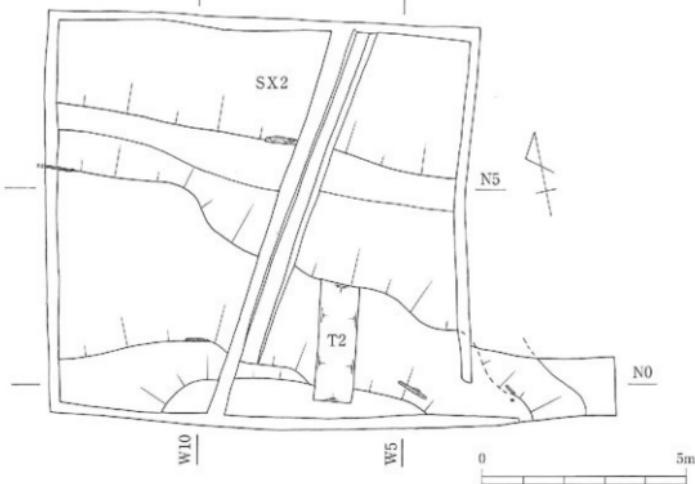
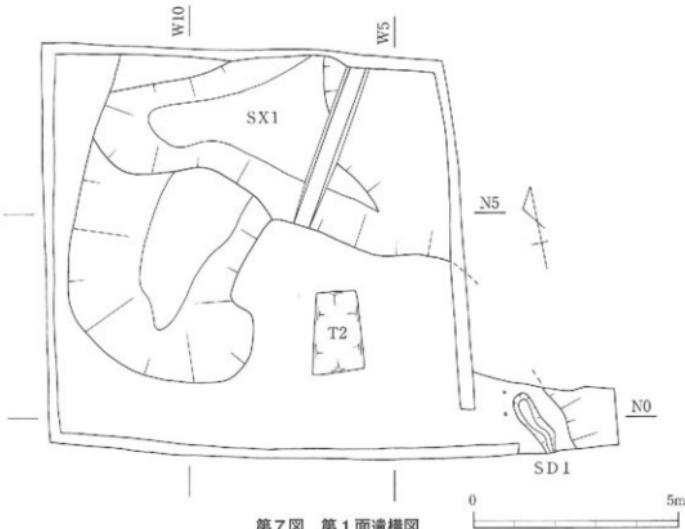
第4層：暗灰色粘土。層厚約10~35cmを測る。遺物をほとんど含まない。第1面ベース層を形成する。

第5層：暗青灰色シルト。層厚約10~50cmを測る。古墳時代の土器を包含する。

第6層：暗褐色腐植土。層厚約5cmを測る。主に調査区南側で見られる。古墳時代の土器を包含する。

第7層：明青灰色砂礫。層厚約20cmを測る。弥生時代後期から古墳時代にかけての土器をやや多く包含する。第2面ベース層を形成する。

第8層：明青灰色中粒砂。層厚約20cmを測る。弥生時代後期から古墳時代にかけての土器を包



含する。第3面ベース層を形成する。

第9層：灰白色細粒砂。工事深度の関係で未掘のため、層厚は不明である。

## (2) 検出遺構

今次の発掘調査では3面にわたる遺構面を検出した。但し第1面については、安定した生活面というよりも、当地が水成堆積物で埋没していく過程を検出したものと思われる。以下に順を追って、各遺構面と主な遺構の概要を記す。

なお検出遺構には一連の番号を付け、その前にSD：溝、SX：不明・その他などの分類記号を付した。

### a. 第1面（第7図、図版1）

第4層（暗灰色粘土）をベースとして、浅い落込みと小溝1条などを検出した。検出面は北から南に向って緩やかに傾斜し、調査区内での高低差は約7cmを測る。

#### 落込み SX 1

平面「L」字形のごく浅い落込みで、未掘部分もあるが東側で南側に方向を変えるようである。幅4.3m～4.65m以上、深さは最深部で25cmを測る。落込み底は西から東に緩く傾斜し、高低差は19cmを測る。

#### 溝 SD 1

南北方向に走向し、全長1.65m以上、幅50cm、深さ3cmを測る。人為的な溝か、それとも水流などの自然作用で生じた痕跡かについては不明である。

### b. 第2面（第8図、図版2）

第7層（明青灰色砂礫）をベースとして、調査区の北側で緩やかな落込みを検出した。

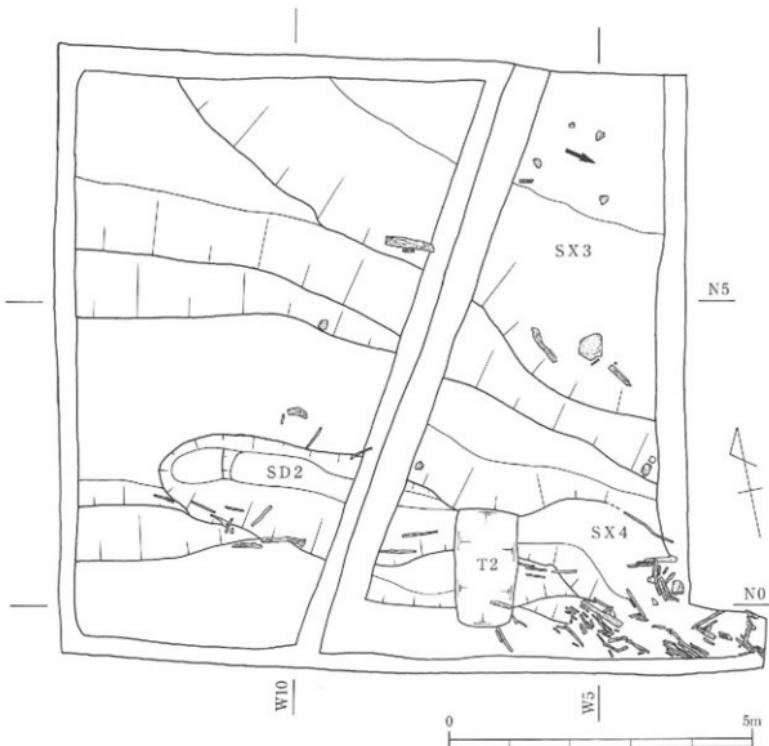
#### 落込み SX 2

北側に向かって傾斜する河道状の浅い落ち込み地形で、検出部分で幅7.5m以上、深さは最深部で75cmを測る。底部は西側から東側へと緩やかに傾斜し、高低差は15cmを測る。

ベース土は薄い暗褐色腐植土（第6層相当）と木枝などで構成されており、調査区東隅付近では基盤となる砂層に木杭2本を打ち込んで固定していた（第11図）。このベース土内から、4世紀代の土師器、5世紀代の須恵器などが出土した。

### c. 第3面（第9図、図版3・4）

第8層（明青灰色中粒砂）をベースとして、前述のベース層（第6層）を取り除いた状態で、落込み・溝1条・護岸状施設などを検出した。



第9図 第3面遺構図

### 落込み SX 3

北側に向かって傾斜する河道状の浅い落ち込み地形で、検出部分で幅9.8m、深さは最深部で59cmを測る。底部は西側から東側に向けて緩やかに傾斜し、高低差は33cmを測る。落込み内で、人頭大の自然石が散見できた。

### 溝 SD 2

落込み SX 3 の肩に沿うような状態で出土した。全長5.0m × 幅2.1m、深さ25cmを測るが、東端部では溝の輪郭が不明瞭になる。人為的な溝か、水流の浸食などによる自然作用で形成されたものかについては不明である。

### 護岸状遺構 S X 4 (第10・11図)

落込み S X 3 の肩付近で、木片などを敷き詰めた木組みの護岸状遺構が出土した。木片は全長約10m×幅約2mの範囲にわたって東西方向に分布し、特に東半部で木枝が濃密なのに対し、西半部ではやや疎らであった。さらに未掘部分の東西各方向にも展開するものと思われる。

横木と思われる木材は全長40～70cm、径4～5cm程度を測るものが多いたが、一部には全長1m強程度のものも散見された。総じて枝を払っただけのような自然木を横に渡していたが、一部に板状の加工木材やほぞ穴が穿たれた木材など、建築部材の転用材と思われる物も含まれていた。

東端部では2本の木杭 (S X 5・S X 6) が打ち込まれており、両杭間の間隔は40cmである。この付近から横木と杭を結んだと思われる、紐状に加工した樹皮 (74) が出土した。

#### 杭 S X 5

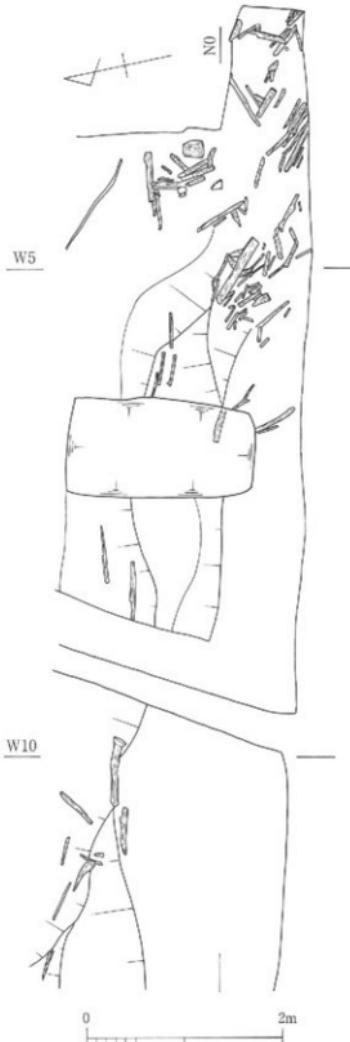
残存長35cm、径4cmを測る。自然木を粗加工して先端部を尖らせ、やや斜め気味の状態で出土した。元々斜めに打ち込まれていたのか、水流などの加圧によって変形を受けたのかは不明である。

#### 杭 S X 6

残存長10cm、径5cmを測る。自然木を尖らせた杭の先端部のみが残存していた。

### (3) 出土遺物

出土遺物は、確認調査分と併せるとコンテナ24箱分を数え、うち土器類が12箱、加工痕のある木片が12箱であった。遺物の内訳は、弥生土器・土師器・須恵器・木製品・獸骨・桃の種など多岐にわたった。

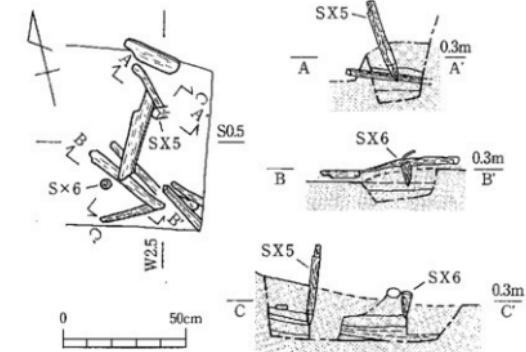


第10図 護岸状遺構 S X 4 遺構図

### 第3層出土遺物（第13・14図）

土師器壺・高坏、竈形土製品、須恵器壺・壺・坏身・坏蓋などが出土した。遺物の下限年代は7世紀前半である。

1・2は土師器である。1は壺である。口縁部1/9からの反転復元で、残存高13.9cm、口径16.2cmを測る。布留式期新相（古墳時代前期後半）に相当する。



第11図 護岸状造構S×4拡大図（東端部）

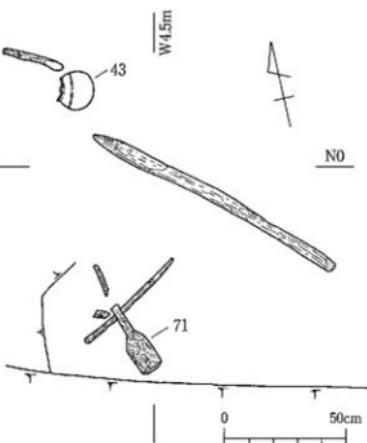
2は高坏の坏部である。口縁部が3/4残存し、残存高4.8cm、口径20.1cmを測る。屈曲部が陵状になり、外面はハケ調整、内面は磨きを施す。布留式期新相（古墳時代前期後半）に相当する。

3～17は須恵器である。3は広口壺である。口縁部1/5からの反転復元で、残存高6.8cm、口径15.8cmを測る。頸部に列点紋と9条1組の櫛描き波状紋を施す。初期須恵器で陶邑窯編年の高藏216型式～大野池46型式（5世紀前半～中頃）に相当する。

4・5は壺の口縁部である。4は口縁部1/4からの反転復元で、残存高5.3cm、口径11.2cmを測る。体部外面にカキ目を施し、口縁部内面に4条の平行線を刻む。高藏46型式（7世紀後半）に相当する。5は口縁部1/4からの反転復元で、残存高6.0cm、口径15.8cmを測る。高藏217型式～高藏46型式（7世紀前半～中頃）に相当する。

6は短頸壺である。口縁部1/8からの反転復元で、残存高3.2cm、口径8.8cmを測る。高藏46型式（7世紀中頃）に相当する。

7～9は坏蓋である。7は全体の約8割が残存し、器高4.9cm、口径14.9cmを測る。陶器



第12図 遺物出土状況図

山15型式～高蔵10型式（6世紀前半）に相当する。8は口縁部1/6からの反転復元で、残存高4.8cm、口径14.8cmを測る。陶器山85型式～高蔵43型式（6世紀後半）に相当する。9は全体の2/3が残存し、器高4.0cm、口径14.0cmを測る。口縁端部にヘラ状当て痕が残る。高蔵43型式～高蔵209型式（6世紀末～7世紀初頭）に相当する。

10は有蓋高壺の壺部と思われ、底部に脚付け根の痕跡が僅かに残る。口縁部1/3からの反転復元で、残存高5.0cm、口径12.0cmを測る。陶器山15型式（6世紀前半）に相当する。

11～17は壺身である。11は全体の約6割が残り、器高4.9cm、口径10.8cmを測る。高蔵23型式（5世紀末）に相当する。12は口縁部1/8からの反転復元で、器高4.0cm、口径12.7cmを測る。高蔵209型式（7世紀初頭）に相当する。13はほぼ完形であるが全体的に大きく歪んでおり、器高4.2cm、口径13.8cmを測る。陶器山85型式～高蔵43型式（6世紀後半）に相当する。14は全体の約8割が残存し、器高4.7cm、口径13.0cmを測る。陶器山85型式（6世紀中頃）に相当する。15は受け部1/6からの反転復元で、残存高4.0cm、受け部径16.3cmを測る。高蔵209型式（7世紀初頭）に相当する。16は全体の約8割が残存し、残存高4.7cm、受け部径16.6cmを測る。高蔵10型式～陶器山85型式（6世紀中頃）に相当する。17は全体の約7割が残存し、器高3.2cm、口径9.9cmを測る。底部に「×」状のヘラ描き記号を記す。高蔵217型式古相（7世紀前半）に相当する。

18～21は竈形土製品である。18～20はともに焚口と付け底部分である。21は全体約3割残存からの反転復元で、器高37.5cm、掛け口径18.4cm、底径45.3cm、正面幅43.8cm（把手含む）を測る。外面は不定方向の粗い板なでを施すが、一部に叩き痕が僅かに残る。内面は粗いなで調整を施す。焚口に付け底の痕跡が残る。稲田編年の第1段階（6世紀代）に相当する。

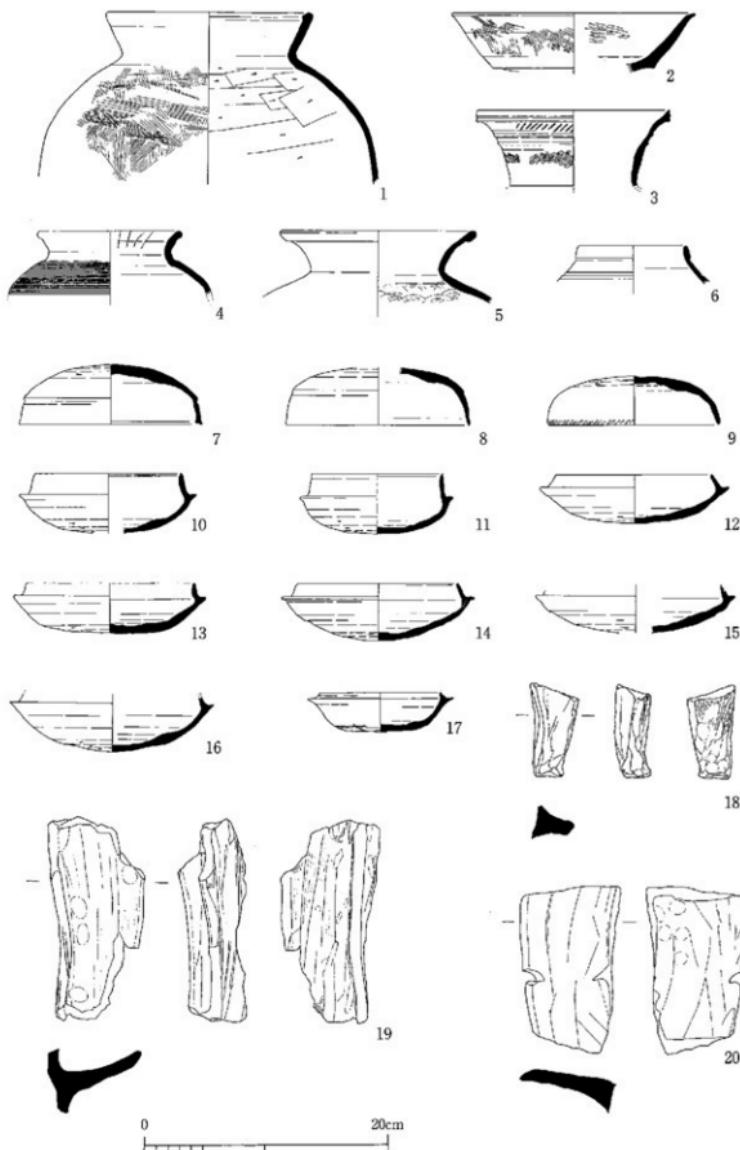
## 第5層出土遺物（第15図）

土師器壺・小型丸底壺・鉢、須恵器壺蓋などが出土した。遺物の下限年代は6世紀後半である。

22は弥生土器壺である。口縁部1/4からの反転復元で、残存高5.4cm、口径16.7cmを測る。体部外面に彫りの深いハケ調整を施す。東海系土器の可能性もある。

23～27、29～31は土師器である。23は布留式壺である。口縁部が約7割残存し、残存高7.8cm、口径12.4cmを測る。口縁端部は玉縁状に肥厚し、体部外面は叩き目を粗くなで消し、体部内面にヘラ削りを施す。布留式期古相（古墳時代前期前半）の所産である。24・25は壺である。24は口縁部1/3からの反転復元で、残存高5.5cm、口径16.7cmを測る。体部内外面と口縁部内面にハケ調整を施す。庄内式期（古墳時代初頭）頃と思われる。

25は口縁部1/7からの反転復元で、残存高9.8cm、口径13.4cmを測る。体部から口縁内外面にかけて磨きを施す。庄内式～布留式期（古墳時代初頭～前期）の所産と思われる。26は小型



第13図 包含層出土遺物（1） 1～20：第3層

丸底壺である。口縁部1/4からの反転復元で、残存高6.2cm、口径9.2cm、胴径9.6cmを測る。布留式期新相（古墳時代前期後半）の所産である。

27は鉢である。完形で器高5.5cm、口径10.3cmを測る。外面にヘラなで、内面に磨きを施す。古墳時代後期（6世紀代）の所産である。

28は須恵器環蓋である。口縁部1/3からの反転復元で、残存高5.2cm、口径16.0cmを測る。高蔵209型式（7世紀初頭）に相当する。

#### 第6層出土遺物（第15図）

土師器甕・壺・鍋もしくは瓶、須恵器甕などが出土した。遺物の下限年代は古墳・飛鳥時代である。

29～35・37は土師器である。29～31は壺の口縁部である。29は口縁部1/5からの反転復元で、残存高9.5cm、口径18.2cmを測る。体部外面から口縁部内外面にかけて磨き、体部内面にヘラ削りを施す。布留式期（古墳時代前期）に相当する。30は口縁部1/5からの反転復元で、残存高5.0cm、口径14.0cmを測る。布留式期（古墳時代前期）頃の所産と思われる。31は口縁部1/4からの反転復元で、残存高7.8cm、口径21.2cmを測る。口縁部内外面に磨き、体部内面にヘラ削りを施す。庄内式～布留式期（古墳時代初頭～前期）に相当する。

32は小型壺である。口縁部1/4からの反転復元で、残存高6.5cm、口径11.4cm、胴径11.0cmを測る。体部外面下部と口縁部内面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

33・35は甕である。33は口縁部1/5からの反転復元である。残存高5.7cm、口径13.3cmを測る。体部外面と口縁部内面にハケ調整を施し、体部内面に粘土紐接合痕が残る。概ね布留式期（古墳時代前期）に相当すると思われる。35は口縁部1/10からの反転復元で、残存高8.4cm、口径14.8cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。布留式期古～中相（古墳時代前期前半～中頃）に相当する。

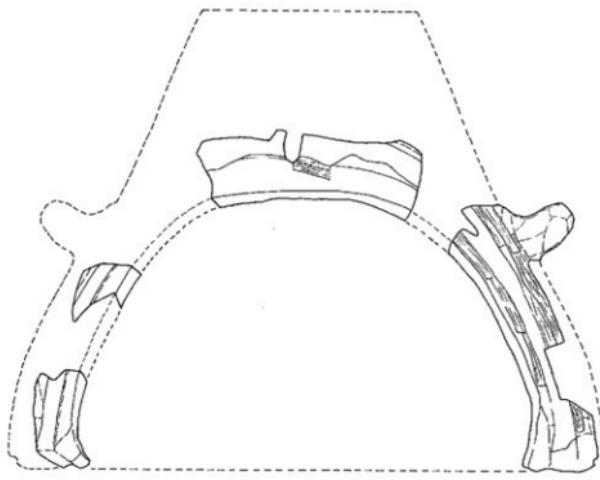
34は二重口縁壺の口縁部である。口縁部1/5からの反転復元で、残存高5.3cm、口径18.8cmを測る。概ね布留式期（古墳時代前期）に相当すると思われる。

36は須恵器甕である。完形で器高10.0cm、口径8.2cm、胴径9.8cmを測る。頸部の稜を境にして、上部は6条1組、下部は8条1組の計2列の波状紋を施す。初期須恵器で高蔵216型式～大野池46型式（5世紀前半～中頃）に相当する。

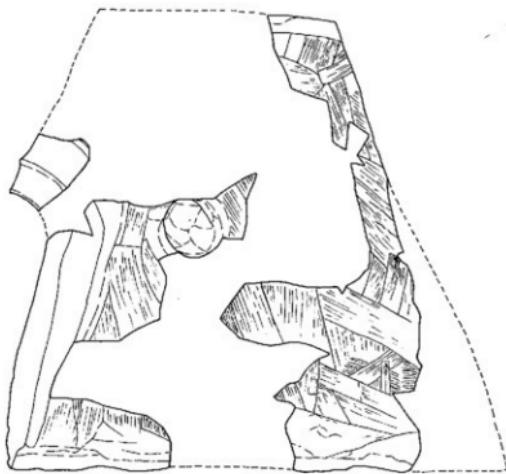
37は土師器大形鉢もしくは瓶の把手と思われる。外面にハケ調整を施す。概ね古墳～飛鳥時代の所産である。

#### 第7層出土遺物（第16図）

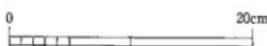
弥生土器壺・甕、土師器甕・高坏・鉢、須恵器脚部・高坏、木製品堅櫛・紐状樹皮などが出



1



21



第14図 包含層出土遺物（2） 21：第3層

土した。下限年代を示す遺物は6世紀後半～7世紀初頭の須恵器高坏（54）である。但し1点のみであることと、第6層の薄い付近から出土していることから、上層からの混入の可能性も考えられる。これを除外すれば、遺物の年代は概ね4～5世紀代である。

38～40は弥生土器である。38は壺である。底部1/8からの反転復元で、残存高3.1cm、底径7.8cmを測る。体部内外面にハケ調整を施す。39・40は甕である。39は残存高1.9cm、底径4.4cmを測る。体部外面に叩きを施す。畿内第V様式（弥生時代後期）に相当する。40は残存高2.3cm、底径4.4cmを測る。体部外面に叩きを施す。畿内第V様式（弥生時代後期）に相当する。

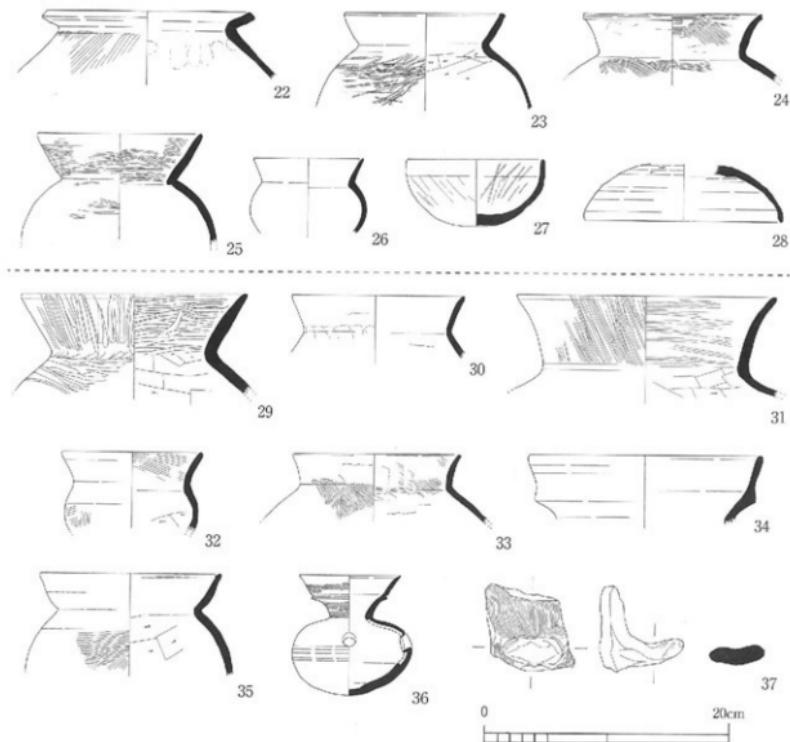
41～52は土師器である。41～43は甕である。41は口縁部1/4からの反転復元で、残存高5.0cm、口径14.8cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。布留式期中相（古墳時代前期中頃）の所産である。42は口縁部1/7からの反転復元で、残存高7.6cm、口径10.8cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。口縁部が二重口縁を呈する山陰系土器である。布留式併行期古相（古墳時代前期前半）に相当すると思われる。43は胴部1/2からの反転復元で、残存高15.3cm、胴径17.3cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施し、内面底部に指頭圧痕が残る。概ね布留式期（古墳時代前期）に相当する。

44～46は二重口縁壺である。44は口縁部1/6からの反転復元で、残存高6.8cm、口径16.0cmを測る。頸部にハケ調整の痕跡が残る。古墳時代前期の山陰系土器と思われる。45は口縁部1/4からの反転復元で、残存高4.5cm、口径15.8cmを測る。色調は内外面がにぶい黄橙色、胎土はにぶい黄橙色を呈する。庄内式併行期（古墳時代初頭）の吉備系など外来系土器と思われる。46は口縁部1/8からの反転復元で、残存高4.7cm、口径14.6cmを測る。概ね布留式期（古墳時代前期）に相当する。

47～49は土師器甕である。47は残存高4.9cm、口径13.6cmを測る。体部外面にハケ調整を施す。布留式期新相（古墳時代前期後半）の所産である。48は二重口縁を呈し、口縁部1/6からの反転復元で、残存高5.7cm、口径13.4cmを測る。内面・外面ともにハケ調整を施す。山陰系土器と思われる。概ね布留式併行期（古墳時代前期）の所産である。49は口縁部1/4からの反転復元で、残存高5.0cm、口径10.6cmを測る。口縁部と体部内面にハケ調整を施す。

50・52は高坏の坏部である。50は口縁部1/2からの反転復元で、残存高6.1cm、口径14.9cmを測る。外面に粗いハケ調整、内面に丁寧なハケ調整を施す。概ね布留式期（古墳時代前期）の所産である。52は口縁部1/4からの反転復元で、残存高4.3cm、口径15.8cmを測る。内面・外面にハケ調整を施す。庄内式期新相～布留式期古相（古墳時代初頭後半～前期前半）の所産である。

51は平底鉢である。口縁部1/8からの反転復元で、残存高8.3cm、口径12.6cm、底径7.5cmを測る。体部内面・外面にハケ調整を施し、体部外面下部には手持ちヘラ削りを施す。色調は内外面・胎土ともに灰黄褐色を呈する。韓式系土器を模倣した在地産の土器の可能性もあり、概



第15図 包含層出土遺物（3） 22～28：第5層 29～37：第6層

ね古墳時代中・後期（5～6世紀代）の所産と思われる。

53・54は須恵器である。53は器台などの脚の裾部である。裾部1/20からの反転復元で、残存高2.0cm、裾径21.8cmを測る。裾部に4条1組の櫛描き波状紋を施す。概ね古墳時代中期（5世紀代）の所産である。54は高坏の脚部である。全体の約7割が残存し、残存高12.1cm、裾径11.4cmを測る。3方向に2段の方形透かしを施すが、いずれも脚内部まで貫通していない。陶器山185型式～高藏209型式（6世紀後半～7世紀初頭）に相当する。

## 第8層出土遺物（第16図）

弥生土器壺・土師器小型丸底壺・高坏・甕・器台・鍋もしくは瓶、須恵器甕（もしくは陶質土器平底有孔広口小壺）、木製品横植・柄頭などが出土した。遺物の下限年代は古墳～飛鳥時代である。

55～63・65・67は土師器である。55～59は小型丸底壺である。

55は口縁部1/3からの反転復元で、残存高6.5cm、口径9.2cm、胴径8.1cmを測る。布留式期古・中相（古墳時代前期前半・中頃）に相当する。56は口縁部1/2からの反転復元で、器高7.5cm、口径8.5cm、胴径8.0cmを測る。口縁部外面と体部下部にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。布留式期新相（古墳時代前期後半）に相当する。57はほぼ完形で、器高7.6cm、口径7.8cm、胴径8.2cmを測る。口縁部内面にハケ調整を施す。布留式期新相（古墳時代前期後半）に相当する。58は完形で、器高8.8cm、口径7.7cm、胴径9.6cmを測る。体部外面にハケ調整を施し、口縁部内面にもハケ調整の痕跡が残る。布留式期新相（古墳時代前期後半）の所産である。59は体部のみ残存し、残存高5.2cm、胴径8.0cmを測る。外面に磨き、内面に板なでを施す。概ね布留式期（古墳時代前期）に相当する。

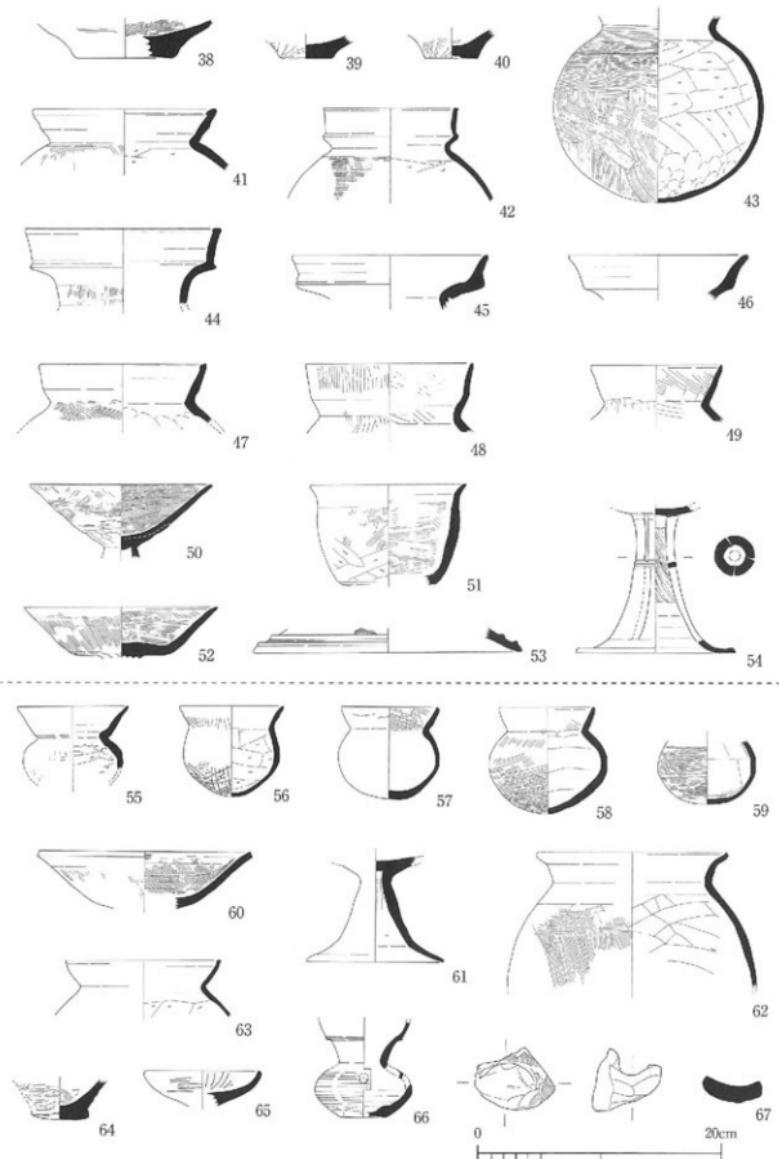
60・61は高坏である。60は坏部である。口縁部1/4からの反転復元で、残存高4.7cm、口径17.3cmを測る。内面にハケ調整を施す。古墳時代前期末の所産である。61は脚部である。残存高8.6cm、裾径11.2cmを測る。布留式期新相（古墳時代前期後半）に相当する。

62・63は甕である。62は口縁部1/6からの反転復元で、残存高11.8cm、口径15.5cm、胴径20.4cmを測る。口縁端部を上方に摘み上げ、体部外面にハケ調整、内面にヘラなでを施し、肩部に平行叩き痕が残る。概ね古墳時代の所産と思われる。63は口縁部1/4からの反転復元で、残存高4.7cm、口径12.7cmを測る。布留式期古～中相（古墳時代前期前半～中頃）に相当する。

64は弥生土器甕である。残存高3.2cm、底径4.6cmを測る。畿内第V様式（弥生時代後期）に相当する。

65は土師器小型器台の坏部と思われる。口縁部1/6からの反転復元で、残存高2.9cm、口径9.2cmを測る。内外面に粗い磨きを施す。庄内式期新相～布留式期古相（古墳時代初頭後半～前期前半）に相当する。

66は須恵器甕（もしくは陶質土器平底有孔広口小壺）である。上下の破片は接合できないが、色調・胎土や出土位置からみて同一個体と思われる。口縁部・体部とともに1/4の破片からの反転復元で、口縁部は残存高3.9cm、体部は残存高4.0cm、胴径7.9cm、底径4.0cmを測る。底部はやや恭筒底気味の平底で、胴部最下部に手持ちヘラ削りを施す。色調は内外面とも暗青灰褐色、胎土が灰赤色を呈する。百濟（韓国西海岸）の中でも榮山江流域の影響が強い器形で、酒井編年の5期（5世紀後半）に近い時期であろう。



第16図 包含層出土遺物 (4) 38～51：第7層 55～67：第8層

67は土師器大形鉢もしくは壺の把手と思われ、外面にハケ調整を施す。古墳～飛鳥時代の所産である。



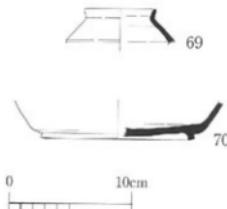
#### 出土層位不明遺物（第17図）

弥生土器壺、須恵器短頸壺・坏身などが出土した。

68は弥生土器壺の底部で、残存高2.4cm、底径3.8cmを測る。  
弥生第V様式（弥生時代後期）に相当する。

69は須恵器短頸壺である。口縁部1/4からの反転復元で、  
残存高2.8cm、口径5.6cm、胴径8.9cmを測る。肩部に1条の沈線  
を巡らす。高蔵209型式（7世紀初頭）に相当する。

70は須恵器坏身である。高台1/6からの反転復元で、残存  
高4.2cm、高台径11.6cmを測る。高蔵48型式～陶器山21型式（7  
世紀末～8世紀前半）に相当する。



第17図 出土層位不明遺物

#### 木製品（第18図）

71～74は木製品である。

71は横柾である。第8層から出土した。ほぼ完形で全長30.4cm、柾径8.0～8.5cm、柄径3.0cm  
を測る。材質はつばき科ツバキ属である。

72は堅櫛である。第7層から出土した。残存長3.3cm、幅3.6cm、厚さ0.3cmを測る。根部と歯部の間12本の細いひごを束ね、これを糸で中央部で結縛して漆を塗る。

73は柄頭である。第8層から出土した。残存長6.5cm、柄2.8cm、握り径4.0cmを測る。柄部分  
に細い縦方向の手斧痕と、柄頭に面取り痕が残る。

74は紐状木製品である。第7層から出土した。残存長23.5cm、幅0.6～1.1cmを測る。平板な  
帯状に切った3枚を軸にして、その上を間を空けずに、1枚を螺旋状に巻いて紐状にして  
いる。材質はばら科である。

#### 【参考文献】

福田孝司 1978「忌の壺と王権」『考古学研究』25-1 考古学研究会

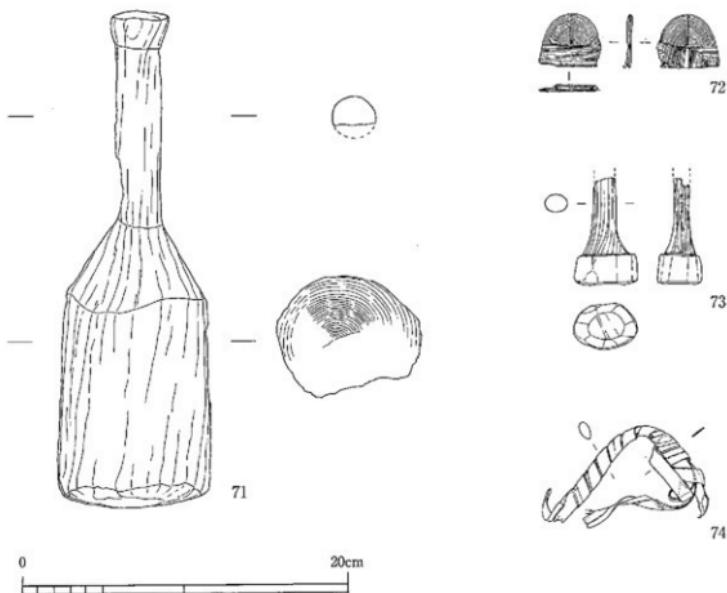
大川清・鈴木公雄・工楽普通（編） 1996『日本土器事典』 雄山閣

（財）大阪府文化財センター（編） 2006『古式土師器の年代学』

加納俊介・石黒立入（編） 2002『弥生土器の様式と編年』東海編 木耳社

酒井清治 2004「須恵器生産の受容と変遷」『今来才伎 古墳・飛鳥の渡来人』 大阪府立近つ飛鳥博物館

杉原莊介・大塚初重（編） 1992『合本 土師式土器集成』本編・上巻 東京堂出版



第18図 木製品実測図 72・74：第7層 71・73：第8層

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

中村浩 2001『和泉陶邑窯 出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版

朴淳發 2001「百濟の南遷と倭」『検証 古代の河内と百濟』枚方歴史フォーラム実行委員会

原田昌則 1993「久宝寺遺跡第1次調査」『八尾市文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会

平安学園考古学クラブ 1976『陶邑古窯址群』I

（公財）八尾市文化財調査研究会（編） 2014『考古資料からみる八尾の歴史—旧石器時代～中世まで—』

## 第4章 総括

### (1) 遺構の変遷

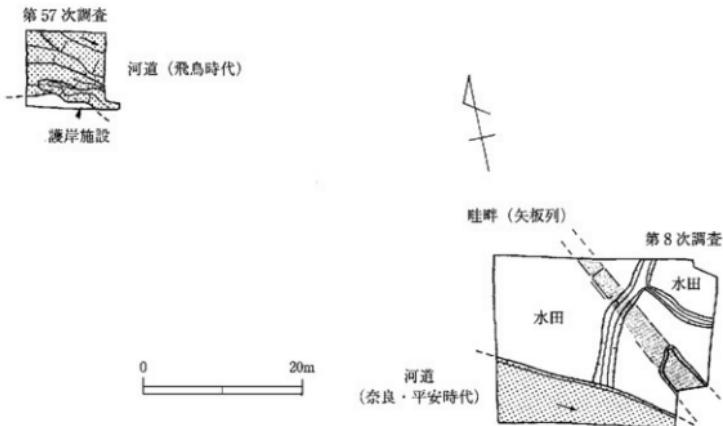
#### 第1面

北から東に伸びるごく浅い落込み S X 1 を検出した。但し遺構面自体は北から南に緩く傾斜しており、埋土（第3層）は水流痕が顕著なシルトと砂の互層からなる水成堆積層で、水流の速い時期と緩やかな時期が交互に繰り返して堆積したことが分かる。このことから一時的な流路ではなく、恒常に水流のある河道で、調査区自体が北西から南東に流れる河道の左岸に位置する可能性もある。埋没時期は7世紀前半以降と思われる。

#### 第2・3面

東西方向に伸びる落込み S X 2・3 と、木組みの護岸状遺構 S X 4 が出土した。護岸状施設は、自然木や一部転用材と腐植土（往時は木葉か）を敷き詰めて、要所で木杭を打ち込み、紐状の樹皮を結んで固定していたようである。敷設時期であるが、覆土（第6層）とベース土（第7層）に5世紀代の須恵器を包含することから、おおよそ古墳時代中期以降と考えられる。

吹田市内における類似の遺構は、第3次・40次調査で出土した木組み遺構がある。同遺構は、第3次調査段階では「堰」と認識されていたが〔吹田市1977〕、その後の拡大調査により現在では河道に伴う堤防状遺構と評価されている。今次出土の S X 4 と比較すると、木組みの



第19図 第8次・57次遺構図

構造面での類似点が看取できる。

また今次調査地から見て東南隣に位置する第8次調査地では、水田や畦畔の遺構が出土している（第19図）。当調査地よりも南側には耕作域が展開していたと考えられていることから、河川の水流による地形の浸食防止、あるいは河川の増水による耕作地への冠水を防ぐ目的で、護岸状遺構が敷設されたと推測される。

このように今次出土の護岸状遺構は、当地における古墳時代の護岸工法を知る資料として、貴重な存在であると言えよう。

## （2）出土遺物

遺物は古墳時代前期の土師器、古墳時代中期から飛鳥時代にかけての須恵器などが、ややまとまって出土した。その中には土師器小型丸底壺（57・58）や須恵器躰（36）のように、完形またはほぼ完形の保存状態が良好なものも見られた。

出土遺物については個体数を計測していないが、参考までに掲載図74点の内訳を出土層位別に見ると、第1・2層が0点、第3層が21点（28%）、第4層が0点、第5層が7点（10%）、第6層が9点（12%）、第7層が19点（26%）、第8層が15点（20%）、出土層位不明が3点（4%）を数えた。特に第3層と第7層から、出土の割合が多い傾向が看取できた。

次に種類別に見ると弥生土器が5点（7%）、土師器・土製品が42点（57%）、須恵器が22点（30%）、その他が1点（1%）、木製品が4点（5%）を数えた。なお石器類や中世以降の遺物の出土は見られなかった。

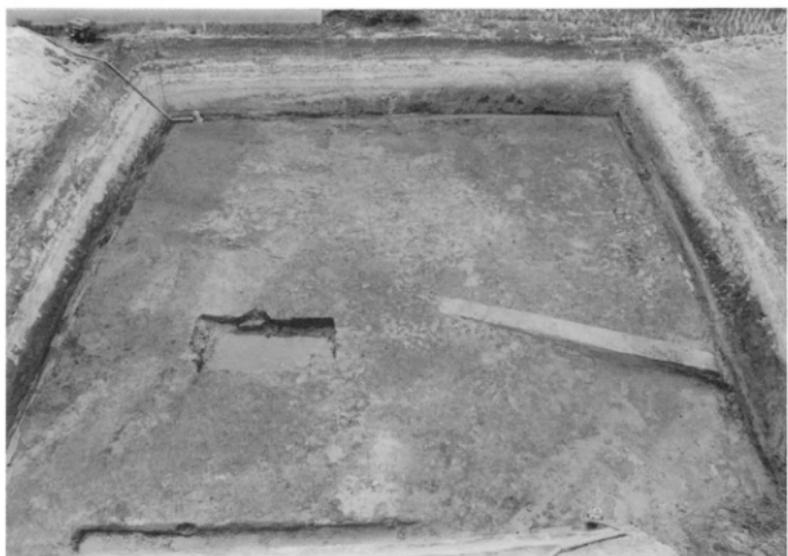
これを時期別に見ると弥生時代後期が5点（7%）、古墳～飛鳥時代前半が68点（92%）、奈良時代が1点（1%）を数え、古墳～飛鳥時代前半が全体の9割強を占めて圧倒的に多かった。

## 【参考文献】

大阪狭山市教育委員会 2013『碧骨堤の謎を探る』（狭山池シンポジウム2013）

吹田市教育委員会 1977『垂水南遺跡発掘調査概報』

図版1 第1面遺構・遺物出土状況



全景（東から）



須恵器壺蓋（7）



須恵器壺身（17）



須恵器壺身（13）



加工木

図版2 第2面遺構・遺物出土状況



全景（東から）



土師器甕（31）



木杭



須恵器壺身（15）



加工木

図版3 第3面遺構



全景（東から）



護岸 S X 4 (東から)



杭 S X 5 (南から)



転用木材

圖版 4

第3面遺物出土狀況



土師器壺 (43)



土師器小型丸底壺 (57)



土師器高壺 (50)



土師器小型丸底壺 (58)



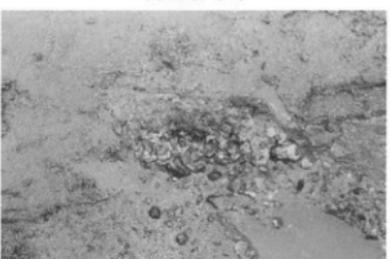
木製品横柄 (71)



木製品柄 (73)



木製品堅櫛 (72)



獸骨下頸

圖版 5 十層斷面

南壁 斷面



西壁 斷面



図版6 発掘調査の経過



発掘調査前



ショベルカーによる表土掘削



遺構精査



護岸SX4の検出



土器の取り上げ



土層断面の実測



拡張部の調査



調査区の埋め戻し

図版7 土師器 (1)



57



58



59



56

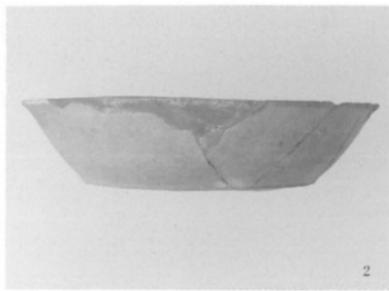


43

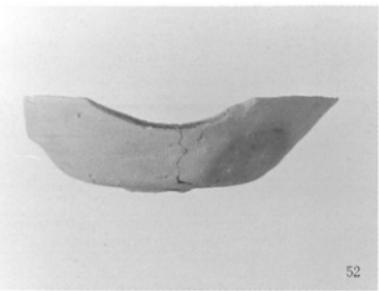


61

図版 8  
土師器 (2)・須恵器 (1)



2



52



23



41



27



3



4

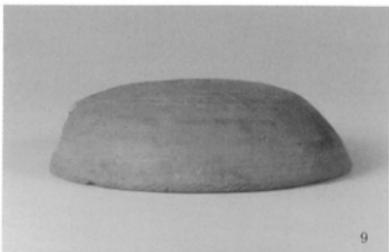


5

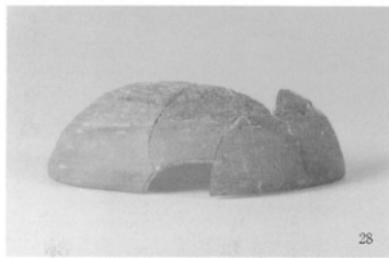
図版9 須恵器(2)



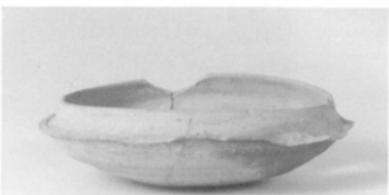
7



9



28



14



13



17



36



54

圖版 10

竈形土製品・木製品



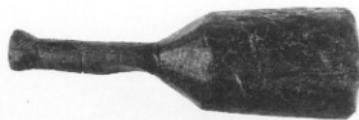
21



72



73



71



74

## 報告書抄録

|        |   |  |  |  |  |  |  |
|--------|---|--|--|--|--|--|--|
| ふりがな   | たるみみなみいせきはくつちょうさほうこくしょⅡ                       |  |  |  |  |  |  |
| 書名     | 垂水南遺跡発掘調査報告書Ⅱ                                 |  |  |  |  |  |  |
| 副書名    | 垂水南遺跡第57次発掘調査                                 |  |  |  |  |  |  |
| 巻次     |   |  |  |  |  |  |  |
| シリーズ名  |   |  |  |  |  |  |  |
| シリーズ番号 |   |  |  |  |  |  |  |
| 編集者名   | 瀬口健二  |  |  |  |  |  |  |
| 編集機関   | 吹田市教育委員会                                      |  |  |  |  |  |  |
| 所在地    | 〒564-8550 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL (06) 6384-1231 |  |  |  |  |  |  |
| 発行年月日  | 西暦 2015年3月31日                                 |  |  |  |  |  |  |

| ふりがな<br>所取遺跡名 | ふりがな<br>所 在 地 | コード   |      | 北緯<br>° ′ ″    | 東経<br>° ′ ″     | 調査期間                   | 調査<br>面積 | 調査<br>原因   |
|---------------|---------------|-------|------|----------------|-----------------|------------------------|----------|------------|
|               |               | 市町村   | 遺跡番号 |                |                 |                        |          |            |
| 垂水南遺跡         | 吹田市垂水町3丁目19-5 | 27205 | 88   | 34°<br>45' 40" | 135°<br>30' 11" | 20010305 ~<br>20010323 | 106      | 記録保存<br>調査 |

| 所取遺跡名 | 種別   | 主な時代 | 主 な 遺 構    |  | 主 な 遺 物             | 特記事項 |
|-------|------|------|------------|--|---------------------|------|
| 垂水南遺跡 | 集落遺跡 | 弥生時代 | なし         |  | 弥生土器                | な し  |
|       |      | 古墳時代 | 落ち込み、護岸状木組 |  | 土師器、須恵器、横槌、堅櫛、紐状木製品 |      |
|       |      | 飛鳥時代 | なし         |  | 須恵器                 |      |
|       |      | 奈良時代 | なし         |  | 須恵器                 |      |

## 垂水南遺跡発掘調査報告書Ⅱ

—垂水南遺跡第57次発掘調査—

平成27（2015）年3月31日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号

発行 吹田市教育委員会

この報告書は300部作成し、一部当たりの単価は495円です。

